

大津市の社会教育の展開と今後のあり方について

(建 議)

令和6年6月

大津市社会教育委員会議

大津市の社会教育の展開と今後のあり方について

本建議書は、2部構成である。第Ⅰ部は、子ども読書活動推進事業についてである。第Ⅱ部は、急激な社会情勢の変化を踏まえた今後の生涯学習・社会教育のあり方についてである。

I. 子ども読書活動推進事業について

1. 子ども読書活動推進事業の現状と展望

(1) 子ども読書活動推進の意義

読書は、子どもにとって、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をよりよく生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものである。

今日の情報社会の中においても、日常的に本に親しむことにより、「読み解く力」の基礎を培い、様々な情報・事象から自分にとって必要な要素を取捨選択するなど、自ら考える力を養うことができる。

乳幼児期は、周囲からの語りかけや関わりによって、さまざまな感情的な出来事を体験し、少しずつ言葉を獲得していく。また、絵本や物語を読んでもらうことを通じて絵本や物語に興味を示すようになる。

学齢期に入り文字を学ぶようになると、読書への興味が一層深くなる。本に描かれる世界に親しむことによって、その世界を体験し、想像力を育む。作者の考え方や意図を読みとることで、生き方を学び、自分の世界を大きく広げていく。また、多くの本を読むことで多様な考え方に触れることができる。それらを糧に自分の考えをまとめ、確立していくことで、自ら学ぶ力を身に付けることができる。それと同時に、色々な感じ方、考え方があることに気付き、多様な物の見方を学ぶことができる。

さらに、子どもが楽しく自主的に読書活動を行うには、家庭において読書を楽しむことや、一冊の本を媒介にして、家族が話し合う時間を持つことなども重要である。

以上をふまえ、子どもが楽しく積極的に読書に親しみ、読書習慣が身に付けられるよう、本市をはじめ、社会全体で子どもの読書活動を推進することが重要である。

本市では、「大津市子ども読書活動推進計画（第四次）」（以下「読書計画」という。）を定め、子どもの発達段階に応じた働きかけや、家庭・地域・学校園での取組み、啓発を行っている。これらの実施を通して、読書計画に係る諸施策の取組みの一層の高まりを期待する。

さらに、今回の建議に当たって、現地の視察を行った。視察の結果、次の二つの点を考察した。一つ目に、子どもが楽しく自主的に読書に親しみ、読書習慣を身に付けていることである。二つ目に、子どもの読書活動に関わる人々の活動が、さまざまな関係性を醸成し、豊かな学びの場をつくりだしていることである。つまり本市の子ども読書活

動推進事業では、次の二つの意味を創造しているといえる。一つ目は、子どもたちと活動している人が、主体性を発揮しながら、読書場をつくっていることである。二つ目は、読書推進活動を核とした多様な豊かさが生まれていることである。

(2) 子どもを取り巻く読書環境の変化

今日では、IoT(モノのインターネット)¹や人工知能(AI)などの情報通信技術(ICT)の飛躍的な進展を背景に、社会のあらゆる分野においてデジタル化・グローバル化の進展が見られる。我が国においても新たな社会である「Society5.0」²の実現を目指した取組みが進められている。本市でも GIGA スクール構想³によって、小中学校では一人1台の端末が配備された。

このような情報通信技術の進展に伴い、子どもの読書環境は多様化した。加えて、コロナ禍を経て、スマートデバイス(スマートフォンやタブレット端末など)などの情報機器が子どもの生活に浸透した。スマートデバイスが子どもに及ぼす影響を鑑みながら、利活用も併せて、取組みを進める必要がある。

(3) これまでの取組みと成果

令和5年度大津市社会教育委員会議において、読書計画の令和4年度における取組みの振り返りを行った。

令和4年度は、半数以上の項目で指標の目標値を達成している。目標値の80%以上を達成した項目と合わせると、全体で80%以上の達成となる。そのため、計画はおおむね順調に進んでいると考えられる。

1 : IoT (モノのインターネット)

Internet of Things。身の周りのあらゆるモノがインターネットにつながる仕組みのこと。

2 : Society5.0

「狩猟社会」「農耕社会」「工業社会」「情報社会」に続く、人類史上5番目の新しい社会。「フィジカル空間(現実空間)」と「サイバー空間(仮想空間)」とを融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会。

3 : GIGA スクール構想

2019年12月に文部科学省が打ち出した教育計画。GIGA(Global and Innovation Gateway for All)には、「すべての子どもたちのための、グローバルで革新的な扉」という意味がある。生徒一人ひとりがパソコンやタブレットなどのICT端末を活用し、創造性を育む教育を持続的に実現することを目的としている。教育現場のICT化の推進では、「一人1台の端末(パソコン)の配備」「高速大容量の構内通信ネットワーク環境の整備」「クラウドの活用」が柱となっている。

基本方針1 子どもの発達段階に応じた読書活動を推進します

全般的な取組みや乳幼児期の取組みについては、ほぼ計画通りに行うことができ、成果を得られた。

学齢期以降の取組みについてもおおむね計画通りに実施できた。しかし、学校司書の配置の有無や、子ども読書活動以外の活動との兼ね合い等により、学校により差が生じている。

基本方針2 家庭、地域、学校を通じた社会全体で取り組みます

全般的におおむね計画通りに取組みを進められた。しかし、小中学校では基本方針1と同様の理由から、学校により差が生じている。

また、新型コロナウイルス対策として行われた学校や各施設でのボランティアの受入れ制限などにより、ボランティア人数の減少や活動規模の縮小の影響がみられた。そのため今後は、ボランティアの育成や、ボランティア活動の内容を振り返り、充実に向けた再検討が一層重要となってくる。

基本方針3 子どもの読書活動を普及・啓発します

子どもに関わる施設等で、事業の機会を利用し、保護者に向けて読書の大切さなどを伝えた。

子どもに関わる職員のスキルアップについては、オンラインなどの方法も活用し、研修への参加を促しているが、他業務の関係で参加できない場合もある。

(4) 今後の進め方

まず、読書計画に係る取組進捗状況において、「ボランティア育成」に係る項目について「未達成」が見られるのは、新型コロナウイルスの影響や高齢化による活動縮小などが原因であると考えられる。事業の推進にあたり今後の行政課題は、ボランティアの育成と、ボランティア活動の内容を再検討することである。

次に、令和4年度に目標値に至らなかった「学校司書の配置」に係る項目についてである。小中学校を合わせた総数では目標値に達しているものの、小学校では目標は未達成であったため、引き続き司書の配置拡充に向けた予算を要求するとともに、司書の配置がない学校への対策を講じていく必要がある。次項に詳述したが、学校図書室の視察の結果、司書の配置がない学校に、最低限1週間に2回ほど司書が来てくれるような体制を整えることが必要ではなかろうか。

最後に、読書計画の進捗管理については、事業の完遂が市民にとって重要であること

は言うまでもない。進捗管理上の数値目標の達成に留まらず、それ以上に重要な点は、事業担当者が「事業の実施によって、将来的に子ども達がどのような状態であってほしいか」といった観点において、適切な評価を行うことである。そうした評価を行うために、事業担当者同士で協議する機会を設ける必要がある。各事業担当者が集い、実践報告や意見交換を行う場を、行政が設けることを提案したい。

2. 調査研究実施報告及び各視察先の状況

(1) 真野公民館「すくすくまあむ」の視察（令和5年11月15日）

スタッフが、子どもと関わりと同時に、参加者であるお母さんたちに目を向けている様子が窺えた。スタッフは、時代や社会の変化の中で、お母さんたちがどのような立場に置かれていて、何を感じているのかを柔軟に観察していた。どのようにすれば、お母さんたちが過ごしやすく、楽しく参加できるのかを意識している様子であった。

(2) 大津市立図書館「ととけっこのお話し会」の視察（令和5年12月8日）

図書館の司書や職員が、子どもたちに静かな優しい雰囲気でお話を始めており、子どもたちの意思を尊重するといった雰囲気づくりをしていた点に感銘を受けた。

また、司書としての専門性を強く感じ、矜持、経験、方法論等を明確にして仕事に取り組まれている印象を受けた。

ただ市民にとっても、図書館にとっても残念に思えたのは、質の高い活動に対して、参加者数がそう多くはない点である。親子の居場所としての受け皿があったとしても、そこへ足を運ぶ親子が少ないのは残念であり、多くの人に参加いただければと思う。

(3) 学校図書室の視察（令和5年12月12日、令和5年12月13日）

学校司書の配置校・未配置校で、図書室の雰囲気が大きく異なっていた。配置校では、これまでの作者名による図書の配架から、図書館分類法に基づく配架へ変わっていた。また、学校司書は、児童、教職員の図書に関する様々な要望に即座に対応していた。一方、未配置校では、図書の配架と、破損や汚損した図書の修繕に苦慮しているとのことであった。図書室の掲示物の整備等、取り組みたいことはたくさんあるが司書がない現状では、図書室を充実したものとし活用するには、人手や時間が足りていないことが分かった。

子ども読書活動推進の観点から、本市の各小学校に、1週間に2回ほど学校司書が来てくれるよう体制を整える必要がある。教員の不足が課題とされる中で、学校の図書室の運営は容易ではないと推測される。教育委員会において予算措置し、学校司書の配置を図っていくべきである。

加えて、校内における図書室の位置の見直しも検討課題である。図書室の位置やデ

サイン（おすすめ図書コーナーや、季節の飾りつけなど）を見直し、子どもたちにとって図書室が安心できる場所として機能するよう、環境を整備していくことを提案する。

3. 今後取り組むべき事業の方向性

(1) 大人から子どもへ本を勧める、地域における運動と仕組みづくり

主体的に読書に親しみ、本が好きな子どもを育てるためには、家庭・地域・学校が連携し、多様な読書ができる環境を整える必要がある。具体的には、学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）や地域学校協働活動を活用しながら、家庭・地域・学校が一体となり、大人が子どもたちに積極的に読書の大切さを働きかける仕組みづくりが重要であると考えます。

地域においては、学校図書室の開放、まちなか図書館、商店街との連携など、子どもが行きたくなる図書館づくりの実践を行いたい。読書環境が地域に開かれていく仕組みを作ることで、地域づくり・まちづくりにも資する取組みを地域全体で進めていくことを期待する。市に対して、地域の取組みが進むよう協働的な関係性を構築しながら、適切で継続した支援を望む。

(2) 親子の学びの場としての子ども読書活動

乳幼児の読み聞かせの現場は、子どもに読書のきっかけを与えると同時に、「親子の育ち・学び」に資する場としても機能し得る。保護者同士の育児に対する情報交換や相談、育児の経験伝承の補完などの役割を持たせ、育児世代が「ちょっと行ってみたいな」と思えるような事業を展開していくことで、地域内のつながりづくりにもなる。

市内で活動する子ども読書活動団体や読書ボランティアの協力を得ながら、子ども読書の現場が、親子の生きる力を身に付けるための手助けとなる場になることを期待する。

(3) 子ども読書活動の豊かさを実感できる仕組みづくり

子ども読書活動団体等が、それぞれに大事にしている価値を共有できる場に行行政は寄り添い、協働的に作れるようになれば、読書活動の機能性やサービスの範囲に留まらない、より豊かな展開を模索できると考える。単に「子ども読書の実践」においての機能面に話が終始すると、現場でつくり出される質の豊かさ・生み出している様子に目を向けるということが疎かになりがちである。

子ども読書活動推進には、読書を核とした多様な豊かさと意義があり、社会教育全体との関係性を考えながら子ども読書推進を考えていくべきである。

子ども読書活動推進における多様な豊かさとは、例えば保護者が読み聞かせの会

などに親子で参加することで、子どもたちは本に興味を持ったり、保護者は子どもの変化を知り喜ぶことや、参加者同士で交流して色々なことを知ったり、繋がりを作ったりすることなどである。保護者にとっては、専門的なレクチャーを受けるだけではなく、保護者同士の情報交換など、複層的な学びのプロセスの中で、多様で豊かな学びを得ることができる。さらに、参加者同士のつながりは、主体的なコミュニティの創造へと発展することが期待される。

以上を踏まえ行政に、各団体の活動が、自分たちの活動そのものの意義の多様性・豊かさを認識できるような仕組みを構築していくことを望む。

Ⅱ. 昨今の急激な社会情勢の変化を踏まえた今後の社会教育のあり方について

今年度は、「大津市生涯学習推進計画」の折返し地点を迎える。本計画については、令和5年度大津市社会教育委員会議において、令和4年度における計画進捗状況の振り返りを行い、審議を重ねてきた。

計画初期においては、新型コロナウイルス感染症が全国的に流行し、これに伴い対面の接触が抑えられて、社会教育全般に逆風が吹いてきた。令和5年5月に、新型コロナウイルスの感染症法上の5類移行により平常化が急速に進んだ。新しい生活様式が普及し、社会情勢に変化が起きている。

このような状況下で、いかにして社会教育を盛り返していくのかが、今後の大きな課題である。

1. コロナ禍に伴う現状と課題

大津市社会教育委員会議において、コロナ禍を経て地域や社会に発達・発展がもたらされたもの（メリット）と、衰退したもの（デメリット）について議論を行った。

発達・発展がもたらされたものとしては、「オンライン会議の技術取得」「仕事の選別、簡略化」が挙げられた。「オンライン会議の技術取得」では、人々が集まることを制限されていた時期においても打ち合わせを行うことができるツールが発達し、コロナ禍が一定の収束を見せた今日でも、主要な会議方法として根付いていることは特筆すべき点である。「仕事の選別、簡略化」では、例えばPTA等の団体において、事務・事業の見直しがなされ、事務担当者の負担が大幅に軽減された。これにより、各団体において効率的な運営が行われることとなった。

一方、衰退したものとしては、人々が集う活動と活動への参加である。この変化の結果、活動の担い手の不足という事態が生じている。また、マスク着用等の制限によりつながりが希薄になった等の意見が挙げられた。

「担い手の不足」については、一つに地域団体や大学生のサークルなど、様々な組織で担い手の不足が発生している。コロナ禍以前は各地域団体等の活動の中で少しずつ

新しい担い手の参加があった。しかしコロナ禍により活動が停滞したため、ノウハウの引き継ぎや、活動の伝授がスムーズに行えなくなったと考えられる。

もう一つに、地域における担い手不足という事態も生じている。これまでは定年後に地域活動に入る人たちも多くいた。しかし定年再雇用の普及のためか、地域活動への参加の時期が遅れている。

「マスク着用等の制限により、つながりが希薄になったこと」については、特に子どもにおいて顕著に影響が見られる。コロナ禍での長期間のマスク生活の反動で、挨拶などのコミュニケーションを取ることが苦手な子どもが増加しているように感じられる。

2. 今後の生涯学習・社会教育の視点と役割

人生100年時代といわれる今日においては、健康で生き生きと地域で暮らし、「社会を作っていく、生きていくための多様な経験を培うこと」が求められている。より多くの市民が、生涯学習へ参加できる仕組みづくりが必要である。自主的に意識して一歩を踏み出し行動する人々がまちの中で1%ずつでも増えていくと、つながりやコミュニケーションが生まれ、結果として、地域づくり・まちづくりに良い影響を与えられると考える。

地域のため、子どもたちのための様々な取組みが、地域の人、一人ひとりにとって学びとなり、地域づくりにも資することが期待できる。各々が取り組んでいる豊かな内容を、再発見・共有・評価し合ったり、広げたりすることで、徐々に参加者を増やしていく。このような場に参加する人々が増えることは、地域づくりへ参画する層を厚くし、学びの好循環をつくることへ発展するだろう。

3. 今後取り組むべき事業の方向性

(1) 子ども・若者の「経験を作る取組み」を充実させていくこと

子ども・若者の経験の格差をなくしていくため地域には、学校教育では環境醸成の難しい取組みが求められる。そのために地域において、「経験を作る取組み」を充実させ、子ども・若者の発達と成長を展望したい。

子ども・若者の「経験を作る取組み」の充実には、地域としての取組みができるかどうかの力量が試されている。地域の力量を高めるには、多くの市民の力を結集する必要がある、そのためには、地域学校協働活動（読み聞かせ・図書ボランティア、授業の各種補助等）や地域におけるインターンシップの実施や研修生制度等の充実を展開することが求められる。

(2) 学校・家庭・地域の連携のもと、家庭教育支援施策を充実させていくこと

教育基本法には、地方公共団体の家庭教育支援が明記されている。「大津市生涯学習推進計画（3）次代への継承」では、家庭教育を支援する旨が記載されている。

各家庭の主体性を尊重し、保護者に対する学習の機会や情報の提供など、市は具体的な支援を行っていくべきと考える。しかしながら本市において、子どもたちが健やかに育つ地域社会の実現に向けては、なかなか明確な成果が見えていないのが現状である。

家庭教育は、全ての教育の出発点として位置づけられているので、保護者が学ぶ場を、社会教育・生涯学習のフィールドから積極的に支援してほしい。子育てに悩みを抱えている保護者は非常に多くおり、そうした人達が成長していくための根本的な学びの場づくりや、家庭・地域・学校・行政など多様な主体の連携による支援体制の構築が必要である。

今後、市においては、複数の部局を横断した多角的な支援のあり方を模索していく必要がある。具体的な実践例としては、教育委員会は福祉部局等との連携による事業の展開を挙げたい。例えば、子ども食堂と家庭教育支援チームの取組みを一緒に行うことや、子育てについての情報交換、交流や「パパママ教室」⁴などの行政主催の事業を図書館等の社会教育施設で行うことで、これまでと全く違った展開が期待できる。

これまでの議論をまとめ、次のことを提起したい。行政が行うあらゆる施策やこれに伴う活動には、その事業が当初持っていた目的だけでなく、新たな効果を生み出すなど多様な豊かさを生み出す可能性があり、それらをうまく結びつけながら、より効果が高く、意味のあるものにしていく必要がある。

4：「パパママ教室」

大津市健康保険部保健所母子保健課が実施する「初めてのパパママ教室」のこと。初めて出産を迎える妊婦とそのパートナーを対象に、二人そろって妊娠中や産後の子育てのことを学ぶ機会を提供している。

資料編

1. 審議の経過
2. 大津市社会教育委員一覧

1. 審議の経過

令和4年度

日 時	内 容
令和4年11月11日 旧大津公会堂2階 会議室1、会議室2	社会教育委員会議（第1回） （1）子ども読書活動推進計画について （2）地域学校協働活動について （3）今期の調査研究テーマについて（子ども読書活動推進計画について）
令和5年2月8日 大津市役所新館7階 特別会議室	社会教育委員会議（第2回） （1）子ども読書活動推進事業 調査・研究スケジュールについて （2）令和4年度子どもの読書活動に関する調査結果について （3）令和5年度子ども読書活動推進事業の取組について （4）中学校における新聞の活用について

令和5年度

日 時	内 容
令和5年10月6日 大津市役所新館7階 大会議室	社会教育委員会議（第1回） （1）大津市生涯学習推進計画の進捗状況について （2）大津市子ども読書活動推進計画の進捗状況について （3）調査研究（子ども読書活動推進事業）について
令和5年11月15日 真野公民館	調査研究（子どもの読書活動推進）に係る現地視察（第1日程） 視 察 先：すくすくまあむ（子ども読書活動団体）によるお話会 （0歳児～5歳児対象） 調査内容：おもちゃ遊び、手遊び、絵本読み聞かせ、パネルシアター 見学 団体メンバーへのインタビュー
令和5年12月8日 大津市立図書館	調査研究（子どもの読書活動推進）に係る現地視察（第2日程） 視 察 先：大津市立図書館職員によるお話会（0歳児～3歳児対象） 調査内容：手遊び、絵本読み聞かせ、人形劇、布で遊ぼう 見学 図書館職員（司書）へのインタビュー
令和5年12月12日 下阪本小学校	調査研究（子どもの読書活動推進）に係る現地視察（第3日程） 視 察 先：下阪本小学校図書室 調査内容：図書室の見学、担当教諭へのインタビュー
令和5年12月13日 日吉台小学校	調査研究（子どもの読書活動推進）に係る現地視察（第4日程） 視 察 先：日吉台小学校図書室 調査内容：図書室の見学、担当教諭（司書含む）へのインタビュー

<p>令和6年2月14日 大津市役所新館7階 特別会議室</p>	<p>社会教育委員会議（第2回） （1）調査研究（子ども読書活動推進事業）について （2）コロナ禍を踏まえた今後の社会教育のあり方について</p>
<p>令和6年3月7日 市民文化会館 多目的ホール</p>	<p>社会教育委員会議（第3回） （1）建議書の骨格案について （2）調査研究（子ども読書活動推進事業）について （3）コロナ禍を踏まえた今後の社会教育のあり方について</p>

令和6年度

日 時	内 容
<p>令和6年5月27日 市役所 新館2階 災害対策本部室</p>	<p>社会教育委員会議（第1回） （1） 建議について 大津市の社会教育の展開と今後のあり方について ・子ども読書活動推進事業について ・昨今の急激な社会情勢の変化を踏まえた今後の社会教育のあり方について</p>

2. 大津市社会教育委員名簿

(敬称略)

	委員氏名	備考
学校教育関係者	木村 圭司 ¹	大津市校園長会（唐崎小学校長）
	岡本 幸一郎 ²	大津市校園長会（志賀小学校長）
社会教育関係者	大伴 克己 ³	大津市生涯学習推進会議
	野々口 義信 ⁴	大津市生涯学習推進会議
	宮田 三月 ⁵	大津市生涯学習推進会議
	木下 順造	大津市「人権・生涯」学習推進協議会連合会
	山口 雅史	大津市PTA連合会
	音野 潤子	大津市地域女性団体連合会
家庭教育の向上に 資する活動を行う者	西村さつき	さつき助産院
	塩見 久恵	小松冒険遊び場プレーパークをつくる会
学識経験者	只友 景士	龍谷大学 政策学部
	佐藤 馨	びわ湖成蹊スポーツ大学 スポーツ学部
公募委員	太田 華奈	公募委員
	殿城 幸雄	公募委員

【任期】 令和4年7月7日から令和6年7月6日まで

1：令和4年7月7日から令和5年5月24日まで

2：令和5年5月24日から令和6年7月6日まで

3：令和4年7月7日から令和5年8月1日まで

4：令和5年8月1日から令和6年5月23日まで

5：令和6年5月23日から令和6年7月6日まで